
ツンデレVSデレデレ～どちらも最後はデレですね。

治田 神裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツンデレVSデレデレ〜どちらも最後はデレですね。

【Nコード】

N2429K

【作者名】

治田 神裕

【あらすじ】

龍ヶ崎雄大は春井美奈子と神武麗子の幼なじみだし、ふとした出来事から三人の関係が変化し始める。

そんな話です。ベタですがツンデレとデレデレはどちらが勝つかご期待ください。

起こしてくれるデレ怒るシンデレ（前書き）

恋愛ものは始めてなので未熟なところ貰うありますがご了承ください。

起こしてくれるデレ怒るシンデレ

「ほらっ 早く起きて！」

遅刻しちゃうよ？」

そんな声で目が覚める… …いつも通りの朝だ。

俺 龍ヶ崎雄大^{りゅうがさき ゆうだい}は、自分で言うのも何だが普通の高校生だと思っている。

しかし周りの連中の評価は、モテモテ君、ギャルゲーか、リア充野郎 といった散々な言われようだ。

俺は普通のつもりなんだがなあ。そんなに言われると 結構ショックだったりする。

「なに してんの？早く起きて着替えないと遅刻だよ？」

こうして さつきから俺を起こしているのは、幼なじみの春井美奈子だ。 こうして 小学生のときから毎朝起こしに来るのが当たり前になっている。それを友達に話したら

「それ、なんてギャルゲ？」

と言われたが、どういう 意味かは、わからなかった。ただその後 そいつに「おまえ二次元に生きてるな。」

遠い目で見られたことは未だにトラウマになっている。

しかしのんびりしていると。もう一人にどやされそうなので、美奈子を追い出しさっさと着替えた

「はいっ朝食」

そんな声と共にトーストとハムエッグが差し出される。

しかしまあ、毎朝よく作るもんだ。いろんなことが長続きしない俺にとって、美奈子のこういうところは羨ましい。

出された朝食を食べて、美奈子と家を出るとそこにはもう、幼なじみの姿があつた。

「遅い！ 雄！もっと早く起きれないの？」

そう 言つて、きつい視線を浴びせてくるのは、幼なじみの神武麗子だ。

近所の剣道場に住んでいて昔はよく遊びに行っていた。

「まったく、もっと早く起きないと置いていくわよ！」

こうして麗に毎朝怒られるのも日常だ。

「ごめんごめん、でも 待っててくれたんだろ？」

そう謝ると麗は顔を赤くして反論してくる。

「べっ別に、あんたを待ってたわけじゃなくて、美奈子を待ってたんだから、かつ勘違いしないでよね。」

「ああ、わかってるって麗。」

「わっ分かってるならいいのよ。」

そう言ってさっさと歩き始めてしまう。

「ちょっと待ってよ麗ちゃん。」

慌てて美奈子が後を追う

うん。いつも通りの風景だ。そうして歩くと自然と麗が歩幅を合わせてくれる。

そうやって並んで話しながら登校する。

しばらくすると、同じ高校の生徒が増え、挨拶が飛び交い始める。

そうになると自然と別れて友達と話すようになる。俺もクラスメイトの翔を見つけて話し始める。

「今日も両手に花か、雄大羨ましいねえ。」

茶化すようにいつてくる

「別に、普通だろ それより宿題やったか？」

俺がそう言つと翔は呆れた顔になって。

「普通ときたかりア充しやがって」

と言ってくる、毎回思うのだが、いったいなぜ皆そう言うのだろう？不思議でならない。

起こしてくれるデレ怒るシンデレ（後書き）

始めは日常を描きますが次から三人にある出来事が訪れます。

さてここまで読んでいただきありがとうございます。週一で更新しようと思うのでよろしくお願いします。

宿題（前書き）

続きます。間違い等あるかもしれませんが、
よろしければお読み下さい。

宿題

しかし、そんなことはどうでもいい。
今が続けばそれでいい。

俺はそう思っていた。だからその日も同じような日常が始まると思
った。

「なあ 美奈子宿題やったか？」

教室に着いてすぐ、俺は宿題をなんとかすべく、 美奈子に助けを
求めた。

ちなみに俺と麗と美奈子は同じクラスだ。 美奈子は、俺の後ろ麗は
斜め後ろだ。

「したけど。…まさかまた雄大忘れたわね。」

美奈子が睨んでくる

「いやーやろうとは思ってたんだけど ついつつかり忘れちゃって。」

とりあえず言い訳してみる。

「むーそんなこと言ったって、やってないことにかわりないじゃない。
い。」

くっやはり簡単に見せてはくれないか。

しかしそれで諦める俺と思うなよっ。

「ごめんごめん、次はちゃんとやるから。」

「むー……本当？」

おっ いい反応もう一息。

「本当だって。俺には美奈子しか（宿題を見せてくれる奴が）いないんだ。」

「えっ……………」

これには劇的な反応があった、言った俺が驚いたくらいだ。

「い、今のをもう一回言って、そしたら見せてあげる。」

おおっ見せてくれるのか！

「俺にはおまえしかないんだ。これでいいのか？」

「うん、いい、全然いいよ。」

そう言っつと宿題を写させてくれた。

それを、何故か隣で麗が不機嫌そうに見ていた。

午前中、美奈子は何故かご機嫌だった。

宿題（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ご意見、要望受けつけますのでどんどんご意見ください。

三日おきに更新する予定です。

学食にて（前書き）

よろしければまあ、気長にお付き合いください。

進展には、かなりかかる気がしますが……

まあ暇潰しにでもどうぞ

学食にて

昼休み、いつもなら教室で弁当何だが、今日は、美奈子が忘れていたので仕方なく学食に行くことにした。

「うわっ 混んでやる」

学食に着くと、そこは異常なほど混んでいた。

諦めて、購買でパンでも買おうかな、と思ったが、いつもは購買組の姿を見て、とりあえず、話を聞くことにした。

「おい今日は学食か？」

「おおっ！ 雄大！珍しいな、今日は、春井の弁当はじゃないのか？」

「それが、美奈子が忘れたんだよ。まあ、いつも食わせて貰ってるから、文句は言えねえけど。」

「へえー、あの春井がねえ……」

「ところで、何で今日は学食何だ？」

「ああ……また購買のトラブルだよ、パンが届いてねえんだ。」

「ふーん……またか、」

そう言えば、前もこんなことあったよな。

確かその時も美奈子が弁当忘れてたような……

「おい、雄大！ 急がねえと売切れちまうぞ！」

言われて気付く。

「ヤベッ じゃっ 行ってくるわ。」

必死に並んで、なんとかぎりぎり買えた。

「ふうっ」

一息つく さて、どこで食うかな？

周りをキョロキョロ見渡す。おっ あそこ開いてるな！

「スイマセン ここ いいですか？」

「別に、いいわよ」

ん？なんか聞き覚えのある声だな。

「れ、麗！」

俺はおもわず大声をだしていた。

それに麗はむっとしたようで、

「何よ！私が居たら悪いわけ！」

「いついや悪い訳じゃないけど、ただ、麗が学食にいるなんて、

珍しいから驚いてさ。」

必死に弁解する。

「そう…ならいいのよ」

あれっ？あっさり許して貰えたな。

「……早く食べないと醒めちゃうわよ。」

麗に注意される。

「ああ、悪い麗」

学食にて（後書き）

かなりベタですが見逃してください。

次話は長くかけるようにします。

学食にて2（前書き）

少し早いですが更新です。

よろしければお読みください。

学食にて2

黙って食べることにする。また、怒鳴られたら悪目立ちするからな。

「……………」

「……………」

沈黙が痛い。仕方がない何か適当な話題を振ってみるか……

「なあ、麗、」

「……………何よ……」

「いや、最近どうだ。」

「……………どうって?。」

おっ 食いついてきた。

「ほらっ！道場のこととかさっ」

「ああ……………」

麗は、納得したように頷くと何か考えてから返してきた。

「道場なら心配ないわっ 最近、お弟子さんがたくさん入門したから、それとも何？ また稽古をつけて欲しいの?。」

とんでもないことを言ってくる。

「冗談はやめてくれよ、いきなり運動すらしてないのに、稽古なんて受けたら、身体が壊れちまうよ。」

全力で断る。

「そう、……残念」

そう言って 食事を再開する。

……いかん会話が途絶えた。何とかしないと。

「あーっ　ところで麗、」

「今度は何の用？」

冷たく返してくる。

いやっしかし　いつものように、「黙って食べる」　とか「今忙しい」

みたいに言わないところを見ると、意外と乗り気なのか？

それならもう少し話を振ってみよう。

「ほらっ　麗はどうなんだ？」

「……………どつって？」

凄い既視感。

気を取り直して続ける、

「例えば試合で勝ったとか、テストでいい点とったとかさ」

「…特にはないわね。」

即答された……

「そっそうか」

おかしい、普通もう少し話が続きそうなもんだ。
どうしたものか………あれ？

「おいっ 麗、顔が赤いぞ、熱でもあるんじゃないか？」

麗の顔は少し赤くなっていた。

「ばっ馬鹿違うわよ！」

顔を近づけて覗きこんだら凄い勢いで反論されてしまった。

「違うと言われても実際赤いんだが……」

「こっ これは、辛いものを食べたせいよ！」

そう言うつと残りを凄い勢いで平らげた。

「ご馳走様！」

そう言つと逃げるように学食を出ていった。

……だけど食べてたのサラダだったよな………？

学食にて2（後書き）

まずは、読んで戴きありがとうございます。
また次話もお読みください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2429k/>

ツンデレVSデレデレ～どちらも最後はデレですね。

2010年10月14日14時37分発行